

## 未明童話における「色彩語」について（続）

### — 調査結果からの考察 —

山口 幸 祐 ・ 藤 本 紗 貴 子

#### 【はじめに】

本稿は、「未明童話における『色彩語』について—調査報告—」（『富山大学人文学部紀要』第45号，2006.8，以下，「前稿」と略記）の続稿である。「前稿」では，小川未明童話における色彩語の傾向を調査，整理し，その結果を「色彩語の分類および色彩語数」，「作品別色彩語表」，「対象別基本六色色彩語表」として報告したが，調査結果から気づいた点を若干記述したにすぎなかった。それゆえ，本稿では，「前稿」の「まとめ」をさらに整理，分析し，考察を加えた。（稿の性格上，一部重複する点があるがご容赦願いたい。）

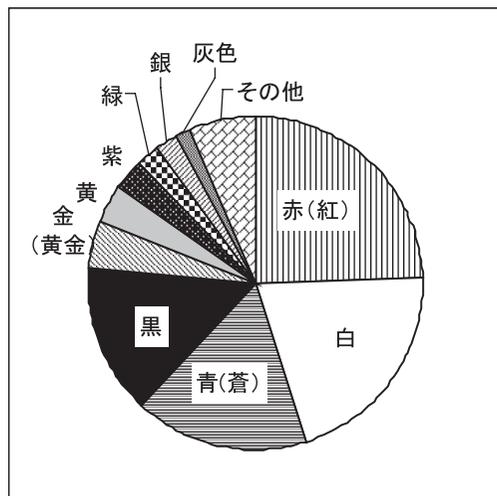
#### 【1】色彩語の種類とその割合

調査対象とした『定本小川未明童話全集』全16巻（講談社，1976（昭和51）年11月～1978（昭和53）年2月。以下，講談社版『全集』と略記）所収の706作品中，色彩語を含む作品は633作，89.7%の割合で色彩語が使用されている。色彩語の合計は4,723個，色の種類は72色，それを各色別，系統色別に分類すると，その比率は図表1，2のようになる。（詳細は，「前稿」—「表1・〈色彩語の分類および色彩語数〉」参照。また，比率は，小数点第2位以下を四捨五入した。以下同じ。）

#### 〈色彩語の種類とその割合〉

赤	=1,156個	(24.5%)
白	=968個	(20.5%)
青	=794個	(16.8%)
黒	=690個	(14.6%)
金	=225個	(4.8%)
黄	=161個	(3.4%)
紫	=145個	(3.1%)
緑	=112個	(2.4%)
銀	=98個	(2.1%)
灰色	=71個	(1.5%)
その他	=303個	(6.4%)

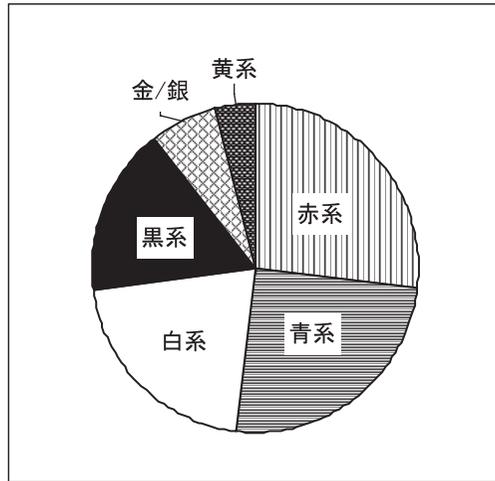
図表 1



〈系統色別色彩語の割合〉

赤系=1,266個 (26.8%)  
 青系=1,194個 (25.3%)  
 白系=974個 (20.6%)  
 黒系=786個 (16.6%)  
 金・銀=323個 (6.8%)  
 黄系=180個 (3.8%)

図表 2



図表 1, 2 から、講談社版『全集』における色彩語は、各色別では、赤、白、青、黒の使用数、上位 4 色で全体の 4 分の 3 (76.3%) 以上を占め、系統色別では、赤・青・白・黒の 4 系統色で全体のほぼ 9 割 (89.4%) を占めることがわかる。ただし、その使用数の順位を見ると、各色別の場合と系統色別の場合とでは青と白の順位に相違が見られる。「前稿」－「表 1・〈色彩語の分類および色彩語数〉」を参照すると、白の系統色が「乳色」1 個であるのに対して青の系統色の種類が多いためだが、それは、色彩語「青系」の用法が多様であることを物語っており、さらなるデータの収集、整理、分析の必要性を示している。また、逆に、色彩語「白」の用法については、雲や雪の描写のように限定された使用例が多く見られるが、例えば、「白い影」(『全集』第 2 巻) や「白い門のある家」(『全集』第 5 巻) のように「白」自体が重要な意味を持つ例には注意が必要である。さらに、後掲、図表 6, 7 を参照すると、講談社版『全集』の各巻の色彩語使用数にある種の偏りが見られる (後述)。

以上の結果をふまえて、未明童話における色彩語研究では、データに基づいた実証的な検証を行った大藤幹夫氏による新潮文庫版『小川未明童話集』の統計<sup>1)</sup>と比較してみた。(数値等の詳細は「前稿」－「まとめ」参照。)

そのデータによれば、新潮文庫版『小川未明童話集』における各色別の使用数の順位は赤・青・白・黒であり、系統色別では青、赤、黒、白である。順位に相違はあるがともに「赤」と「青」が 1, 2 位の位置にある。しかし、講談社版『全集』を対象にした今回の調査では異なる結果が出ている。特に、各色別の色彩語数では「青」よりは「白」が多かった。調査対象の範囲が広がったこと、また、色彩語選定基準の問題もあるだろうが、いずれにしても今後の調査、検証課題であることを示している。

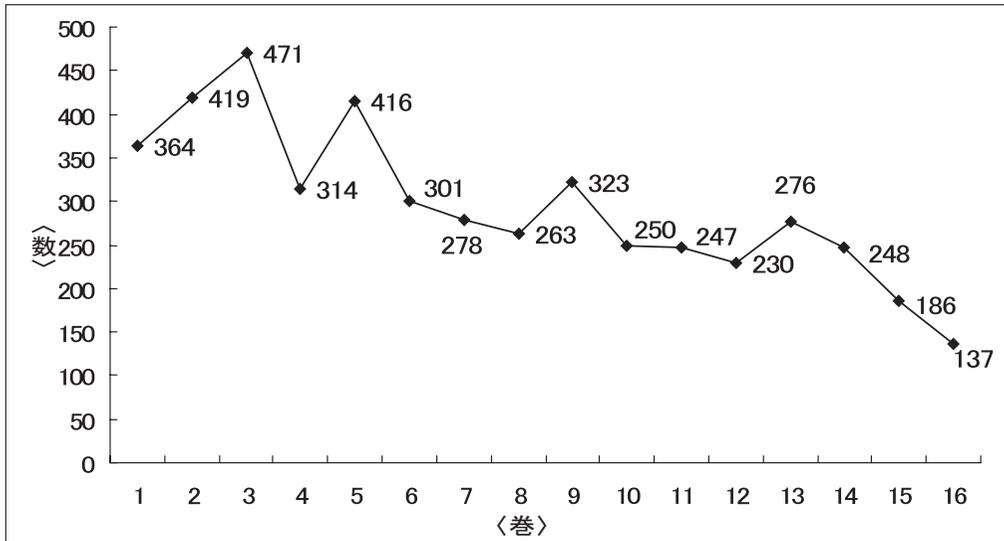
ただし、大藤氏の指摘通り、「赤」が未明童話を象徴する色であり、また「青」が重要な意味を担っていることは間違いない。氏は、未明にとって「赤」は、「はげしい情熱の象徴」であり、「赤いろうそくと人魚」「黒い人と赤いそり」を典型的な未明童話として、「赤」の使用が多いことを指摘している。さらに、新潮文庫版『小川未明童話集』では「赤系」より「青系」の多いことに着目し、「空の青」は「都会への憧れの象徴」であり、「海の青」は「暗く寂しい日本海の色」であると考察を進めて、「未明にとって『赤』は、はげしい都会（青）への反発であると同時に『故郷喪失者』のふるさとへの思いでもあった。」と述べている。

以上の指摘をふまえながらも、今回の調査ではできるだけ多くのデータを収集し、各色ごとにデータに基づく検証が必要であることを実感した次第である。

## 【2】各巻ごとの色彩語数とその推移

次に、「前稿」－「表2・〈作品別色彩語表〉」をもとに、講談社版『全集』各巻ごとの色彩語数を以下のようなグラフで表し、色彩語使用の推移を見ていくことにする。（ただし、「前稿」で示した「基本6色色彩語」とその「系統色」とする。以下同じ。）

図表3 〈各巻ごとの色彩語数〉



図表3のグラフは第3巻を頂点としたほぼ山型の線を描いており、各巻の色彩語数は第1、2巻で徐々に増え、第3巻をピークに第6巻以降はなだらかに下降している。一卷あたりの色彩語数の平均（295個）を念頭に置くと、未明童話において色彩語数が多いのは第5巻までであることがわかる。

色彩語数が最も多い第3巻についてその内容を瞥見すると、作品別色彩語数上位5作品は以下の通りである。

1. 「公園の花と毒蛾」92個（青・青系14, 赤・赤系18, 黒・黒系32, 白・白系13, 黄・黄系13, 金/銀2)
2. 「赤い姫と黒い皇子」31個（青・青系1, 赤・赤系10, 黒・黒系20)
2. 「黒い人と赤いそり」31個（青・青系7, 赤・赤系14, 黒・黒系8, 金/銀2)
4. 「あほうどりの鳴く日」26個（赤・赤系14, 黒・黒系9, 白・白系3)
5. 「ちようと怒涛」24個（青・青系13, 赤・赤系7, 黒・黒系3, 金1)

第3巻収録作品は39作、色彩語総数は471個である。5作品の色彩語の合計204個(43.3%)は一作品あたりの色彩語数が約12.1個である点から見てその割合は大きい。特に「公園の花と毒蛾」の色彩語使用数は群を抜いている。<sup>2)</sup>

次に、5作品の系統色別色彩語使用数を見ると青系、赤系、黒系に対し、白系の割合は少なく、使用されていない作品もある。後掲、図表6, 7を見ると、第3巻で青・青系、赤・赤系、黒・黒系の色彩語数が増加傾向にあるのに対し白・白系は減少している。つまり、前掲5作品には第3巻全体の特徴が表れている。

また、図表3では、第5巻で再び色彩語数の増加が見られる。後掲、図表6, 7を見ると、第3巻で減少傾向にあった白・白系色彩語数が第5巻で最も多いことがわかる。その要因については【4】で述べるが、第3巻、第5巻の傾向は白・白系色彩語数の推移に注意が必要であることを示している。

第9巻では、色彩語数が平均値に比して若干増えているが、その要因は色彩語数323個のうち半数以上(185個)を占める「雪原の少年」(『国民新聞』昭和6年4～6月)にある。孤児の少年正二の生活を描いた「少年時代の体験総集編」である<sup>3)</sup>この作品は未明童話中、唯一の長編童話である。

色彩語の種類は、青・青系=25個、赤・赤系=58個、黒・黒系=42個、白・白系=45個、黄・黄系=4個、金・銀=11個である。使用される色彩語として最も多い赤・赤系は、「正二の顔は、真っ赤になりました」のような顔の描写などの身体に関する表現が多く、青・青系は海、空の描写に使用される例が多い。白・白系は雪、髪、馬など、黒・黒系は雲、鳥、衣など使用例は多様である。主人公正二が雑誌に投稿しようとする詩の中に、「すきとおる紫色に、ぶどうの実が熟し、赤とんぼの小さな翼が輝くころ私の乗る銀色の船が、青い空と波の間を分けて、かわいそうな私を迎えにくる。」のような色彩豊かな表現を見ると、長編童話の中における色彩語の使用法が作品構成とどう関わっているかを分析する素材ではある。

また、第13巻でも色彩語数は多少増加しているが、後掲、図表6から、白の使用数(77個)が関係することがわかる。(なお、各巻の色彩語使用の特徴については【4】で述べる。)

## 【3】小川未明の創作活動と年代別色彩語使用状況

## (1) 創作活動の概観と年代別色彩語使用状況

図表3では、講談社版『全集』の各巻によって色彩語数に大きな違いが認められた。講談社版『全集』全16巻には、童話集単行本から主要作品が収録され、発表年代順に配列されている。また、単行本未収録の作品の場合も初出誌紙の年代順に配列されている。従って、多少の重なりはあるが、第1巻から順に『全集』各巻を見ることで、未明童話における色彩語使用状況の推移を見ることが可能である。以下、未明の創作活動と作風の変化とを照らし合わせ、年代による色彩語使用の傾向を探ってみた。図表4は講談社版『全集』第1巻から第16巻までに収録されている作品の発表年、及び単行本（発表年）の一覧である。<sup>4)</sup>

図表4 〈各巻収録作品の発表年〉

巻	収録作品発表年	収録単行本（発表年）
第一巻	明治39～大正10年	『赤い船』（明43）、『星の世界から』（大7）、『金の輪』（大8） 『赤い蠟燭と人魚』（大10）
第二巻	大正9～12年	『港に着いた黒んぼ』（大10）、『小さな花と太陽』（大11） 『気まぐれの人形師』（大12）
第三巻	大正10～13年	『紅雀』（大12）、『鉛チョコの天使』（大13）、『赤い魚』（大13）
第四巻	大正12～15年	『ある夜の星だち』（大13）、『兄弟の山鳩』（大15）、『鴉の唄うたひ』（大15）、 『海から来た使ひ』（大15）
第五巻	大正13～昭和3年	『蜻蛉のお爺さん』（大15）、『未明童話集』1（昭2）、『未明童話集』 2（昭2）、『彼等甦らば』（昭2）、『未明童話集』3（昭3）
第六巻	大正15～昭和5年	『未明童話集』3（昭3）、『未明童話集』4（昭5）
第七巻	昭和3～7年	『未明童話集』5（昭6）、『日本童話選集』6（昭6）
第八巻	昭和6～8年	『青空の下の原つば』（昭7）、『童話雑感及小品』（昭7）、『雪原の少年』（昭8）
第九巻	昭和6～9年	『雪原の少年』（昭8）、『童話と随筆』（昭9）
第十巻	昭和8～11年	『小豚の旅』（昭10）、『犬と犬と人の話』（昭11）、『未明ひらかな童話読本』（昭11）
第十一巻	昭和9～12年	『ドラネコと鳥』（昭11）、『小学文学童話』（昭12）
第十二巻	昭和11～15年	『日本の子供』（昭13）、『夜の進軍喇叭』（昭15）、『赤土へ来る子供たち』（昭15）
第十三巻	昭和13～23年	『亀の子と人形』（昭16）、『生きぬく力』（昭16）、『僕はこれからだ』（昭17）、 『僕の通る道』（昭12）、『たましいは生きている』（昭23）、『心の芽』（昭23）
第十四巻	昭和21～32年	『みどり色の時計』（昭25）、『太陽と星の下』（昭27）、『うずめられた鏡』（昭29）
第十五巻	昭和6～22年	『雪原の少年』（昭8）、『小豚の旅』（昭10）、『未明カタカナ童話読本』（昭11）、 『ドラネコと鳥』（昭11）、『モウヂキ春が来マス』（昭18）
第十六巻	昭和11～29年	『竹トンボ』（昭14）、『カタカナ童話集』（昭14）、『モウヂキ春が来マス』（昭18）、 『ごどもと犬とさかな』（昭18）、『みどり色の時計』（昭25）、『うみぼうずとおひめさま』（昭25）、『太陽と星の下』（昭27）、 『未明新童話集』（昭29）、『ふくろうをさがしに』（昭29）

第1巻収録作品の単行本『赤い船』(明治43)は未明の最初の童話集である。出版された当時は、まだ“童話”という概念も言葉も成熟途上であるため、“おとぎばなし集”と銘打ち、その巻末にはお伽小説「森」(『女子文壇』明治43年8月)が付されている。未明が創作活動の中心を小説においていた時期であり、新時代における子ども向けの“おとぎばなし”のあるべき姿を模索している中での出版であった。その当時は、小説「物言わぬ顔」(『新小説』明治44年9月)や「薔薇と巫女」(『早稲田文学』明治44年3月)などによって、ネオ・ロマンチズムの先駆者として『早稲田文学』から「推讃の辞」(明治45年2月)を受けるなど、小説の面で評価されていた時期である。

しかし、大正3年、創作活動に専念し、貧困の中で長男哲文を亡くしてから、未明の小説は人道主義的社会主義に傾く。船木枳郎『小川未明童話研究』<sup>5)</sup>は未明の創作活動の作風の変化を以下のように区分している。

【小説】明治37年から大正6年(1904—17)までをネオ・ロマンチズム時代。

大正7年から大正15年(1918—26)までを人道主義的社会主義時代。

【童話】明治42年から昭和6年(1909—31)までをネオ・ロマンチズム時代。

昭和7年から昭和27年(1932—52)までをリアリズム時代。

つまり、未明のロマンチズムの感情は小説から童話作品に移行していったとみることができるのである。

安本美典氏<sup>6)</sup>は筑摩書房刊『現代日本文学全集』(全99巻、昭和28～)から100人の作家の代表作を取り上げて色彩語の使用度を調査し、その結果から、小川未明の名を第1位に挙げている。対象は小説「魯鈍な猫」(『読売新聞』明治45年4月)であり、色彩語使用数は46個である。ついで、田山花袋「田舎教師」(明治42年1月)が44個、平林たい子「施療室にて」(昭和2年9月)が43個である。これは、未明がそのネオ・ロマンチズム時代の小説において色彩語を多用していたことを示している。

大正7年7月、鈴木三重吉主宰の童話雑誌『赤い鳥』が創刊されると、それに刺激を受けて童話雑誌が相次いで刊行され、未明もそれらに寄稿して童話作品が多くなる。本格的に童話を書き出したのは『おとぎの世界』(大正8年4月創刊、同月「お爺さんの家」発表)、大正9年の『赤い鳥』(大正7年の創刊当時、未明は童話ではなく童謡「紅い雲」を発表。大正9年1月、童話「酔っぱらい星」発表)、『童話』(大正9年4月創刊、10月「ぴかぴか頭の話」発表)においてであり、その他婦人雑誌、大衆雑誌、新聞にも精力的に執筆している。大正10年前後は特に代表作として評価の高い童話が多く発表されており、色彩語数の最も多い第3巻はちょうどこの時期にあたる。

この間、未明は社会主義的作家の代表的作家と目される存在だったが、大正15年5月13日に「今後を童話作家に」（『東京日日新聞』）という、所謂「童話宣言」を発表し、以後は小説を捨てて童話に専心することを表明する。未明の「童話宣言」はトルストイの影響を受けて、「小説によって大人を教化することよりも純真な児童に頼ろう」（船木枳郎）としたものであった。そして、昭和2年にそれまでの童話作品を集成した『未明童話集』の刊行（丸善株式会社）が始まり、4年後に『未明童話集』全5巻が完成したのを契機に未明の作風はリアリズムへと傾いていった。<sup>7)</sup>

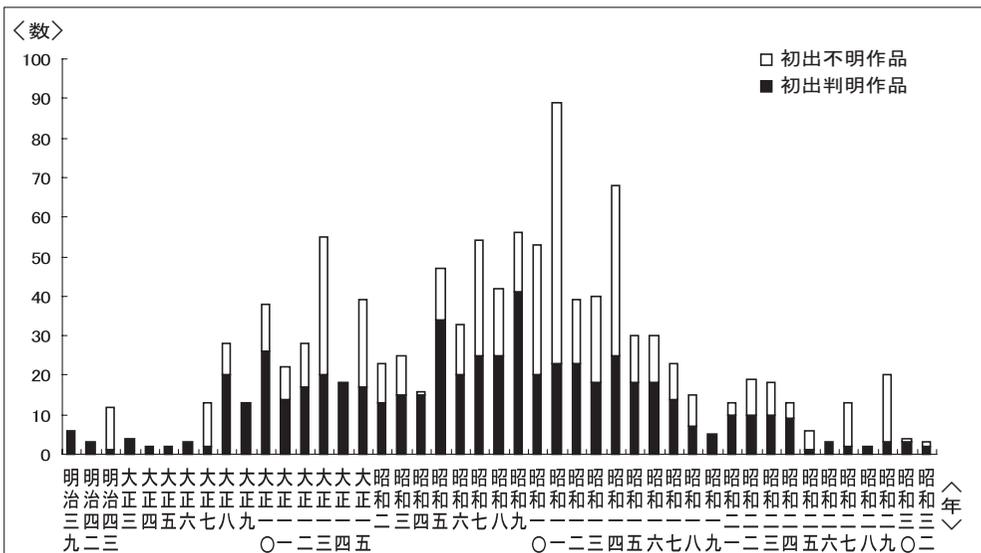
今回の調査では講談社版『全集』第6巻以降、色彩語数が減少するという傾向が見られたが、未明童話がネオ・ロマンチズムからリアリズムへとその作風が変化した昭和6年にあたるのが講談社版『全集』第7巻である。図表3を見ると、本来、童話の「イメージ作りの基礎」<sup>8)</sup>となるはずの色彩語が、むしろ、この「童話宣言」以降に減少しているのは興味深い。

未明はリアリズム時代に入る昭和8年から『コドモノクニ』（大正11年1月創刊）、『コドモアサヒ』（大正12年11月創刊）に幼年童話を毎号のように発表している。これらは『全集』第15、16巻にまとめて収録されているが、幼年童話においてもリアリズムの作風は変わらず色彩語使用数は少ない。

（2）童話発表数と色彩語使用状況

次に、未明の童話創作活動との関係を見るために、年代ごとに童話の発表作品数を調べてみた。<sup>9)</sup>

図表5 〈発表年別作品数〉

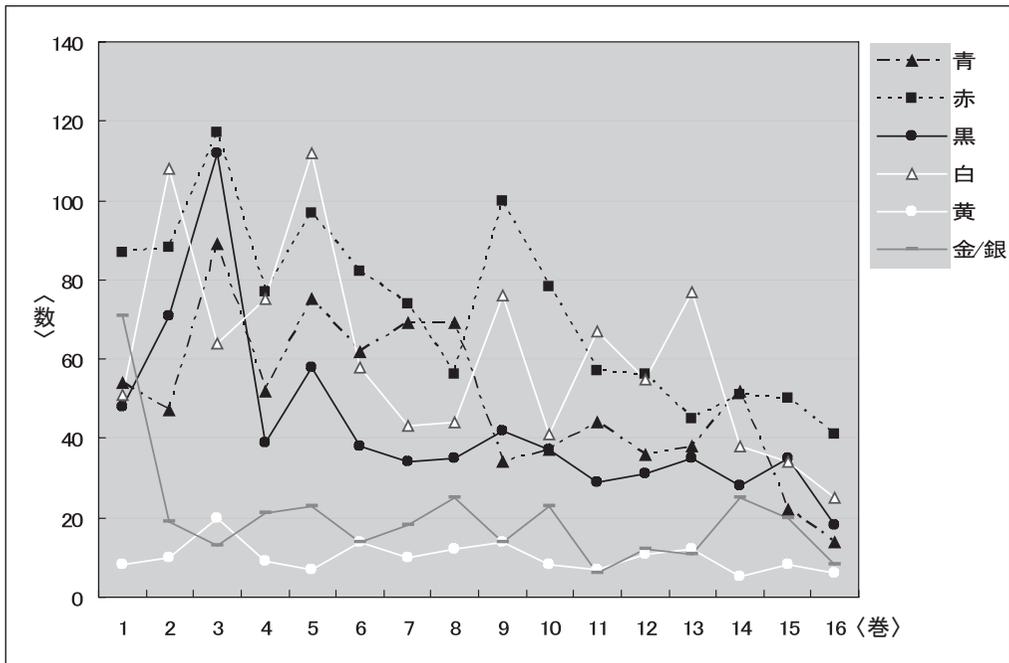


図表5によると、作品発表数が多くなるのは「童話宣言」以後である。しかし、図表3と対照すると、童話作家として旺盛な創作活動をしていた時期に増加する作品発表数に比べ、色彩語数はむしろ減少傾向にある。その要因として、一つは、すでに、未明の作風はネオ・ロマンチズムからリアリズムに変わっていたことと関係すると考えられる。また、大藤幹夫氏<sup>10)</sup>は安本美典氏の作家の年齢と色彩語との相関関係の調査<sup>11)</sup>から、「色彩語の使用度の大きい作家」10人の平均年齢が29.2歳、「色彩語の使用度の小さい作家」10人の平均年齢が36.5歳であるという結果をふまえて、作家が年齢を重ねるにつれて色彩語の使用数が少なくなる傾向にあると述べている。「童話宣言」を発表した大正15年、未明は44歳である。未明童話における色彩語数の減少が年齢と関係があることをうかがわせる指摘である。

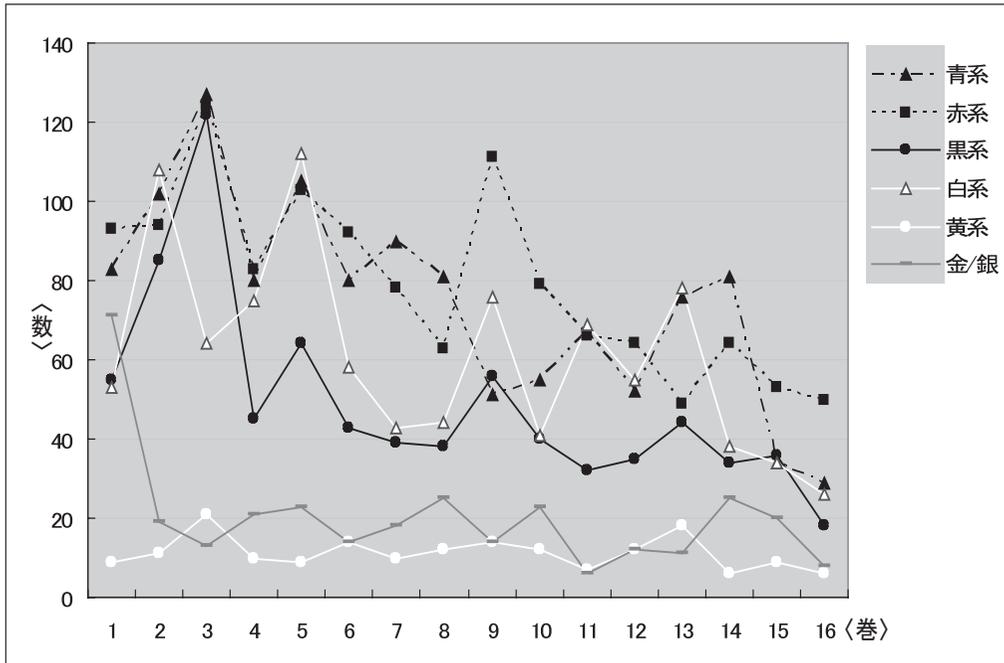
#### 【4】各巻ごとの基本色別、系統色別色彩語数とその推移

「前稿」－「表2・〈作品別色彩語表〉」で得たデータから、講談社版『全集』各巻における基本色別、系統色別の色彩語数をグラフに表すと図表6, 7のようになる。

図表6 〈基本色別色彩語数〉



図表7 〈系統色別色彩語数〉



図表6, 7を対照すると、基本色別色彩語数と系統色別色彩語数では、多少の違いはあるものの全体的にはおおよそ同じ形の線を描いている。特に白と白系では巻ごとの推移はほぼ同じと見てよい。それは、【1】でも述べたように、白の系統色は「乳色」しかないためである。同様に黒と黒系でもほぼ同じような形を描いている。黒の系統色が9色であるため、基本色と系統色の数にはそれほど大きな違いが見られないのである。

一方、系統色がどちらも25色と多い赤・赤系、青・青系の場合はどうだろうか。

赤、赤系の色彩語数の推移の形が似ているのは、赤系1266個のうち赤が1156個（91.3%）であることが理由である。しかし、青、青系では1194個のうち青は794個（66.5%）であり、その割合は赤・赤系と比較すると少ない。青の系統色には紫（145個、12.1%）や緑（112個、9.4%）などが含まれるために、青と青系ではその使用状況と推移の違いが見られるのである。

以上のことをふまえながら、以下、図表6と図表7とを対照し、基本色別色彩語数と系統色別色彩語数の使用状況について気づいたことを記述する。

#### （1）青・青系

①図表6, 7を見ると、青、青系ともに第3巻（127個）をピークに減少傾向にある。どちらも第4巻（80個）で一時減少して第5巻（105個）で多くなるのは図表3で見た色彩語数全体

の推移と似ている。しかし、第9巻での増加は見られない。むしろ、赤、赤系と白、白系の使用数が増え、色彩語全体の数が増加しているのである。

②図表7を見ると第3巻では青系(127個)、赤系(124個)、黒系(122個)の色彩語はほぼ同数である。一方、図表6では青(89個)は赤(117個)、黒(112個)に比べ少ない。その要因は、前述のように、青の系統色には25種類の色彩語が含まれるため、青と青系とでは各巻における使用数に大きな差が生じるのである。さらに詳しく見ると、青系では第1巻(83個)、第2巻(102個)と徐々に色彩語数の増加が見られ、第2巻では赤系よりも多いが、青は赤を下回っている。また、青のみで見ると第2巻では第1巻よりも減少しているが、第1巻の青系を見ると102個の青系色彩語のうち半分以上(55個)が青を除く系統色で占められている。第2巻の系統色もやはり最も多いのが紫で20個、次いで緑が13個である。(「前稿」－「表1・〈色彩語の分類および色彩語数〉」を見ると、青の系統色としては紫と緑が多く、全体的な傾向であることがわかる。)

③また、第13巻については、図表7では青系(76個)は赤系(49個)より多く、白系(78個)に次いで2番目に多い使用数である。一方、図表6では、青は使用数3番目(38個)で、黒の使用数(35個)に近い。第13巻では青系全体で76個あるうち半分(38個)が青を除く系統色で占められている。紫と緑はともに12個ずつ使用されている。

④第14巻について、図表7を見ると、青系(80個)が他の系統色と比べて明らかに多い。図表6でも青が52個で色彩語数が最多であるが、赤(51個)とほぼ同数である。このような差については、②や③と同様に青の系統色の多さが原因であり、紫が9個、緑が7個の使用が認められる。青・青系の色彩語数は、【1】でも述べたように、系統色である紫と緑の使用例が特に多く、また多様でもあり、その用法と推移には注意を払う必要があることがわかる。

## (2) 赤・赤系

①赤・赤系では、図表6,7ともに同様な傾向を見せていることは既に指摘したが、また、図表3の色彩語全体の推移ともほぼ同じ傾向を示し、基本色、系統色とも第9巻では第1,2巻以上に多い。第9巻で著しく増加している理由は【2】で述べたとおり、「雪原の少年」にある。

②図表6をみると、第1巻では赤の使用数(87個)が青(54個)、黒(48個)、白(51個)に比べて多い。作品別色彩語数を見ると、赤の使用が最も多いのは「赤い船」(14個)、次いで「赤いろうそくと人魚」(12個)である。「赤いろうそくと人魚」は言うまでもなく未明童話の代表作であり、「赤い船」は最初の童話集の題名に採られている作品である。赤・赤系の使用数が最も多い第3巻には及ばないが、第1巻での使用数の多さは、未明が童話創作の初期から赤・赤系の色彩に関心を寄せていたことを示している。

③幼年童話の収められた第15巻と第16巻の色彩語数の少なさはすでに指摘した。図表6,7を見ると、青・青系、黒・黒系、白・白系では図表3の全色彩語数と同じく減少していることが

わかるが、それに比べると、赤・赤系の減少率は少ない。

④赤の系統色は青系と同様に25色あるが、青系のように巻ごとによる系統色の使用数のばらつきが少ないためか、基本色と系統色のグラフでその推移を比較してもあまり違いは見られない。

### （3）黒・黒系

①黒・黒系の使用数は第3巻で急激に増加し、最も多い。第1巻の2倍以上である。それが第4巻で半数以下に減少し、第5巻で少々増加するものの、以降は特別な徴候は見られない。第3巻における黒・黒系の色彩語の頻出は、未明の童話創作活動と何らかの関わりがあると考えられるが、今後の検討課題の一つである。

②第3巻には題名に黒が使用されている2作品（「赤い姫と黒い皇子」、「黒い人と赤いそり」）が収録され、黒・黒系の使用が多くなる要因であることを示している。「赤い姫と黒い皇子」では黒に20個使用されている。題名にあるように「皇子」という表現で5個使用され、その他でも眼鏡、馬車、シルクハットなど「皇子」に関するものは黒で表される。この作品で、予言者が赤い姫と黒い皇子の結婚を「赤が、黒に見込まれている。お姫さま、あなたは、皇子に生き血を吸われることとなります。この結婚は不吉でございます。もし、ご結婚をなされば、この国に疫病が流行します。」というように、黒という色に象徴的な意味を持たせている。「黒い人と赤いそり」の結末部で、「黒い人影」と「赤いそり」を出現させているのも同じ理由であろう。

③また、【2】で例示したように、第3巻で黒の使用が最も多いのが「公園の花と毒蛾」（注2参照）であることには注意を要する。黒32個のうち「黒百合」（23個）の使用は象徴的である。

### （4）白・白系

①図表3の色彩語数全体の推移とおおよそ似た傾向を示す青・青系、赤・赤系、黒・黒系に比べ、白・白系は各巻での変動が大きく、色彩語数の最高値は第3巻ではない。また、系統色が「乳色」1色であるために基本色別、系統色別色彩語数の推移にはあまり変化がみられないことはすでに述べた。

②白・白系は第5巻（112個）で最も多く、ついで第2巻（108個）に多い。第5巻では一つの作品に偏って使用されていないが、第2巻の場合は「白い影」が46個を占めている。第2巻には47作品収録されているので一作品あたりの平均値は2.3個であり、「白い影」の使用数は明らかに多い。“白い影”の怪異を描くこの作品は、線路を横ぎる正体不明の“白い影”（それは白い大男・老人・もやと様々な姿で現われる）によって汽車の事故が多発するという内容だが、結末部では、赤マントを着た娘の手の中で遊ぶ真っ白な猫を「町を騒がした白い悪魔」の正体として描き、「白」という色に重要な意味を持たせている。

③次に増加傾向を示しているのは第9巻（76個）、第11巻（69個）、第13巻（78個）である。

第9巻では「雪原の少年」で白・白系の色彩語数は45個あったが、使用例は多様で限定された対象を取っていない。第11巻では、「幼友だち」で25個、「らんの花」で10個、白の使用があった。どちらの作品でも花を対象とする使用例が最も多く、「幼友だち」で8個、「らんの花」で8個ある。第13巻では、一つの作品に偏った使用はなかった。

(5) 黄・黄系

①第3巻(21個)と第13巻(18個)で多いが全体的に大きな変動はみられない。「公園の花と毒蛾」では公園に咲いた黒百合と同様に世間を騒がせた毒蛾の色として7個使用されている。その他は花の色に5個、蝶に1個見られる。

②系統色は黒系と同じ(9色)だけあるが、黄・黄系の色彩語数は少なく、「前稿」で取り上げた『全集』収録作品の中でも題名として使用されているものはなかった。

(6) 金/銀

①第1巻(66個)のみ極端に多い。その要因は「金の魚」の金が44個を占めているからである。すべて題名にある「金の魚」としての使用である。次いで、「めくら星」では金に8個、銀に2個使用されている。これらの対象語はすべて星である。また、未明童話の代表作の一つ、「金の輪」で、金は6個、すべて「金の輪」としての使用である。

②金/銀では、系統色はなく、全色彩語数に占める金銀の割合は低いにもかかわらず、「前稿」であげた『全集』収録作品で金/銀を題名に使用した作品数をみると10作品ある。各巻で金/銀の使用数を見ると、題名に使用された作品で金/銀の色彩語数が多いという結果が得られた。

**【まとめ】**

本稿では前回の調査で得た結果から、全色彩語数および基本色別、系統色別色彩語数の各巻ごとの特徴と推移を探ることで年代別の色彩語使用状況と未明の創作活動との関連を見ることができた。

基本色別、系統色別色彩語については各色ごとの特徴を挙げ、色彩語だけではなく、いくつかの作品では色彩語の対象語も取り上げたが、まだその全体像を見るにはいたっていない。そのためには今後、「前稿」に付した「対象別基本六色色彩語表」を活用していく必要がある。

図表6,7の基本色別、系統色別色彩語数のグラフから第3巻をみると、青系、赤系、黒系がほぼ同数で白系は極端に少なく、第4巻、第5巻では黒系が減り、青系、赤系、白系がほぼ同数であるという特徴がみられる。【4】-(3)でも赤と黒の組み合わせについて少々触れたが、本稿の考察からは色彩語を単色で見えていくだけではなく、それぞれの色彩語を組み合わせた使用法が未明童話の中でどのような意味を持つのか、どのような効果を与えるのか、調査、検証の必要があると思われる。今後の課題である。

付記：本稿は、富山大学人文学部の山口と藤本紗貴子（富山大学大学院人文科学研究科国文学専攻修士課程2年）の共同研究によるものである。その一部は「前稿」で報告したが、その後、金沢近代文芸研究会平成18年度6月例会で口頭発表の機会を得たことを契機に、さらに分析と考察を加えることができた。当日、貴重なご意見を賜った会員諸氏に感謝申し上げるとともに、大方のご叱正、ご教示をいただければ幸いである。

なお、「前稿」の訂正をここに提示し、ご寛恕を請う次第である。

（誤）90頁8行目：前者を固定されたものの → （正）前者を固定されたもの

（誤）92頁32行目：金・銀は225個で4.7% → （正）金・銀は323個で6.8%

## 注

- 1) 「小川未明と『赤』」（『宮沢賢治童話における色彩語の研究（改訂版）』日本図書センター、1993.6）
- 2) 「公園の花と毒蛾」は未開の地に咲く真っ赤なとこなつの花が広い世の中にあこがれて都会の公園に移るといふ内容の作品である。とこなつの花は、北海を旅する渡り鳥にとって、青い海を航海する船の赤い旗のように恋しい存在として描かれる。また、都会の公園では、赤い唇と黒い腹帯の女軽業師を忘れられない男がその女の姿に似ている黒百合を手に入れようとする姿が描かれる。色彩豊かな表現が多く、作者の意図的な作品構成法と考えられるが、今後の検討課題である。
- 3) 畠山兆子『日本児童文学史上の7作家 小川未明』（大日本図書、1986.10）
- 4) 講談社版『定本小川未明童話全集』第14巻の巻末「童話作品一覧」を参考に作成。
- 5) 『近代作家研究叢書83』（日本図書センター、1990.1）
- 6) 『創作の秘密—作家の性格と心理—』（誠信書房、1963.6）
- 7) 以上は、船木枳郎『近代作家研究叢書83小川未明童話研究』（日本図書センター、1990.1）などを参照。
- 8) 大藤幹夫氏は「童話は成人文学以上にイメージを大切にする文学である。色彩語は、そのイメージづくりの基礎ともなるものである。」と述べて、童話における色彩語研究の意義を指摘している。（『宮沢賢治童話における色彩語の研究（改訂版）』—「はじめに」、日本図書センター、1993.6）
- 9) 発表作品数調査の資料として『定本小川未明童話全集』第14巻巻末「童話作品一覧」を参考にしたが、作品発表のない年月がある（明治40年・41年、大正2年、昭和20年・31年）。
- 10) 大藤幹夫「色彩語研究の問題点」（『宮沢賢治童話における色彩語の研究（改訂版）』日本図書センター、1993.6）
- 11) 安本美典「男の文章、女の文章、青年の文章、老年の文章—文章心理学による考察」（『国語の教育』国土社、1968.12）